少年とともに

多摩に、子どもシェルターを!

神垣 真歩 Maho Kamigaki（73期）

1. 子どもシェルターとは

子どもシェルターとは、様々な事情により、安全に暮らすことができないと感じている子どもたちを、一時的に保護し、衣食住を提供する居場所です。子どもシェルターは児童福祉法に規定されたものではありませんが、自立援助ホームの諸規定が適用されます（2011年7月19日付厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知「児童自立生活援助事業の実施について」の一部改正について）。

2004年、東京に、全国で初めての子どもシェルターである「カリヨン子どもの家」が開設され、現在、全国に20以上の子どもシェルターが誕生しています。

2. 多摩に子どもシェルターを作りたい

上述のとおり、東京には、社会福祉法人カリヨン子どもセンターが運営する「カリヨン子どもの家」があります。もっとも、子どもシェルターには定員があります。今日帰る居場所がない子どもの選択肢の1つとして、自分たちの手で多摩地域に子どもシェルターを作りたい、そんな想いを持った東京三弁護士会多摩支部の弁護士有志が福祉・医療等の様々な立場で、日々困難を抱えた子どもたちを支援している頼もしいメンバーとともに、その想いを具体的な形にするべく、動き始めました。

3. NPO法人子ども・若者センターこだま設立

2022年9月6日、NPO法人子ども・若者センターこだまを設立しました。当法人は、虐待・非行その他の理由により、居場所を失った子どもと若者に、安心・安全に暮らせる場を提供し、一人一人の尊厳と主体性、その選択を尊重し、自立を支援し、もって子どもと若者の権利を擁護することを目的としています（当法人定款第3条）。

また、「こだま」には「木霊（こだま）が住む自然豊かな多摩地域で、大人たちがこだまのようにしっかり子どもたちの声を受け止められるように」「子どもたちが『のぞみ』ではなく『こだま』のようにゆっくりと癒やされて安心して暮らすことができるように」そして「子どもたちの声がこだまする、あたたかい多摩になるように」と、たくさんの意味が込められています。

4. シンポジウム「はじめの一歩 多摩に子どもシェルターを!」開催

2022年10月1日（土）には、日野市七生公会堂にて「はじめの一歩　多摩に子どもシェルターを！」と題するシンポジウムを開催しました。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、会場参加とオンライン参加の併用型で実施し、合わせて約110名の方にご参加いただきました。

シンポジウムでは、1部に、アフターケア相談所ゆずりは所長である高橋亜美さんによる基調講演「安心と楽しいをいっしょに～虐待を受けてきた人と共に生きていく日々～」、2部に高橋亜美さん、NPO法人猫の足あと代表理事の岸田久惠さん、こだま副理事長かつNPO法人居場所づくりプロジェクトだんだん・ばぁ理事長の加藤雅江さん、こだまメンバーの片岡智子弁護士の4名によるパネルディスカッションを行いました。1部の基調講演では、高橋亜美さんから、社会的養護に関わってきた中で感じた子どもたちが抱える困難について語っていただき、2部のパネルディスカッションでは、それぞれの立場で子ども・若者と関わってきた経験を踏まえ、多摩地域で子どもや若者の居場所づくりに大人が関わる必要性や重要性を語っていただきました。

また、パネルディスカッションの後には、こだま理事長の木村真実弁護士から、子どもシェルターの説明及び必要性の話やこだまへのご協力のお願いがあり、さらに、同時期にともに子どもシェルター開設の準備を進めている全国各地の団体からオンラインで一言ずつメッセージをいただきました。

シンポジウム開催後には、アンケートの回答等を通じて、たくさんの温かいお言葉をいただき、正会員・支援会員・ご寄付のお申込みもいただきました。オンライン配信の不手際等、反省すべき点も多くありましたが、困難を抱える子どもたちが置かれている現状について、真剣に話し合い、子どもたちのために何かできないかと、ともに取り組み、支えてくれる人が多くいることを実感できたことは大きな収穫であり、忘れられない素敵なシンポジウムとなりました。

シンポジウムの様子

5. 終わりに

NPO法人子ども・若者センターこだまは、2024年1月から、子どもシェルターの運営を開始できるように、現在、準備を進めています。多くの方に、私たちの活動を知っていただき、ご支援・ご協力をいただければ幸いです。当法人のホームページもございますので、ぜひ「NPO法人子ども・若者センターこだま」で検索してみてください。

「カリヨン子どもの家」で出会った少年との食事会

児童福祉チーム　吉田幸一郎 Koichiro Yoshida（68期）

1. コタン

2018年に「カリヨン子どもの家」で弁護士として出会った当時16歳だった少年の新成人を祝って食事会を開催しました。私が初めてカリヨンの子ども担当弁護士（略して「コタン（子担）」と呼んでいます。）として活動した事案を少しだけ紹介させていただきます。

2. カリヨン子どもの家

「カリヨン子どもの家」は、様々な事情により、生きていく上で困難を抱えた子どもたちが緊急避難できる施設です。運営主体の正式名称は、社会福祉法人カリヨン子どもセンターで、2004年に設立されました。私が所属する子どもの権利委員会の児童福祉チームのメンバーも多く関わっています（子ども担当弁護士として登録するためのカリヨン研修は定期的に行われていますので、ぜひご参加ください。）。私は2018年に研修を受けてメンバーとして登録しました。

3. 少年との出会い

尊敬してやまない素敵な先輩弁護士と共同で担当した初めてのケースでした。当時16歳の少年です。最初の仕事は、それまで暮らしていた児童養護施設から退去し、病院に入院しなければならない少年の付添いでした。出会いはなんといっても衝撃的で、挨拶をしても、何を言っても、何度話しかけても「無視」「無視」「無視」の連続で、本当にこの子の担当としてやっていけるのか、とても不安な気持ちになったのを覚えています。

4.「入院しない!」

「絶対に入院しない！同意しない！帰る！」と病院への入院を断固拒否し、徹底抗戦する少年と、「受け入れてくれる施設はないの！行く場所がないんだよ！入院しよう！」と必死に少年を説得しようとする児童福祉司や施設関係者との数時間にわたる攻防を「まあ、無理やり言っても、本人が嫌だっていうなら、無理だよね…、どうすんだろ？今日帰れるのか？」と考えながら院長室の様子を廊下のベンチに座ってただただ眺めていました。

5. 少年の気持ち

午前から始まった戦いが全く終わる気配を見せず、午後2時を回った頃、児童福祉司や施設関係者に疲れが見え始めたため、気持ちを切り替えるのも必要と思い、「おい、別にいいよ。お腹すいたし、入院嫌ならしなくてもいいから、とりあえず一緒にご飯食べに行こうぜー」と少年を昼食に誘いました。幸い少年が（多分お腹もすいており）初めて素直に応じたので、病院近くの蕎麦屋でカツ丼と蕎麦を食べて全く無関係な話をしていたところ、少年がおもむろに「分かってるんだ。本当は入院しなきゃいけないのは分かってるんだよ…。でもね、入院したら絶対そのままになって、誰も会いに来てくれないでしょ。で、ずっとここにいることになるでしょ。それが嫌なんだよ。分かってるんだけど、もう捨てられるのは嫌なんだよ」と話し始めました。今でも当時の場面は覚えています。

6.「約束だよ」

「あー。この子はこの子で心細くて、色々と不安だったんだなー」と彼の気持ちを知って、「それはそれで話が早い！」と思い、「そしたらさ、俺がたまに会いに来てやるから、約束するから、次に来たときもまたここに昼飯食べに行くし、電話番号も教えてやるから、次の施設も見つけるようにするから、今日はどうよ？入院しとくか？」と投げかけてみると、「いいよ、それなら入院してあげるよ！でも、約束だよ」と笑顔で答えが返ってきました。美味しいお昼を食べられたこともあり、満腹になって気持ちもほっとしたんだと思います。

7. 退院、施設入所、大学進学

それから、もうかれこれ4年以上の付き合いになります。最初は毎月、落ち着いてからは2ヶ月に1回くらい会いに行きました。その後、彼は無事退院し、都内の児童養護施設に落ち着きました。そこではバイトや勉強も経験し、今では大学に通っています。友達もできたようで、敬語も上手に使えるようになりました。将来のことも彼なりに考えているようです。

8. そして、成人

彼とのこれまでの付き合いの中では色々ありました。ネットトラブルで高額請求されたり、施設で靴を盗まれたり、その都度、法律的な結構真面目な相談からたわいない（少年にとってはいたって真剣な）相談もたくさんありました。それにひとつずつ答えていたと思います。私は、彼にとっては、「うるさいけど陽気な親戚のおじさん」といった距離感がいいかな、と思い、ずっとそうして接してきました。それが正解かは分かりませんが、まあ良かったと思います。これからも細く長く彼との付き合いを続けていこうと思います。これからも成長を見守っていけたらいいなと思っています。

9. 夜の食事会

彼との夜の食事会は初めてで、実は結構緊張しました。それまでは、中華、ラーメンなど、ランチに誘うことはありましたが、「酔っ払いと一緒にいても面白くないだろうし、もしかしたら、お酒や酔っ払いで、子どもの頃に何か嫌な思いをしてたら嫌だなー」と夜の食事には1回も誘ったことはありませんでした（私がお酒を飲まなければいいだけですが！）。ただ、面倒な陽気な酔っ払いのおじさんの姿もちゃんと見せておいた方がいいだろうと（彼の将来にとっても多分ね）、一世一代の決意をし、お気に入りの居酒屋に連れて行くことにしました。すると、彼もまあ日本酒が好きみたいで、結構飲む飲む！初めてお酒を酌み交わすことができ、それはそれでとても楽しいひとときでした。